

研究ノート

# 近世旅行史研究余録

山本 光正

## はじめに

近世旅行史の研究については多くの業績が蓄積されている。古くは新城常三氏の『社寺参詣の社会経済史的研究』（塙書房 昭39 その後昭和57年に『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』と題しその内容を大幅に加筆訂正し同書店より復刊）がある。近年の代表的業績としては、原淳一郎著『近世寺社参詣の研究』（思文閣出版 平19）及び高橋陽一著『近世旅行史の研究』（清文堂出版 平28）などを挙げることができる。筆者も近世旅行史に関しては幾つかの発表をしてきたが、その過程において思いついたことや考えたことを、脈絡はないが書き残しておきたい。

## 1 地域旅行圏と伊勢参宮

### (1) 地域旅行圏

近世の旅は短期の旅と長期の旅に分類することができる。近世またはそれ以前からかも知れないが、それぞれの地域を中心に手軽な旅行地が存在あるいは形成された。いうならば地域旅行圏である。

地域旅行圏には様々な旅行地があった。こうした旅行地は近世以前に成立していたものや、近世に入って成立した旅行地などがある。多様な旅行地があったが地域旅行圏の中心なるものは信仰の対象となった霊山であろう。例えば九州では福岡県と大分県にまたがる標高1,199mの英彦山。四国では徳島県の標高1,955mの剣山、愛媛県の標高1,982mの石鎚山。山陰では鳥取県の標高1,729mの伯耆大山。北陸地方では石川県・富山県・岐阜県にまたがる標高2,702mの白山。関東地方では神奈川県の高尾山の標高1,252mの大山。茨城県の標高877mの筑波山。そして大雑把になってしまうが東北には出羽三山がある。富士山は取りあえず別格である。この外にも信仰の対象、登山の対象となった霊山は多数あるが、要するに初めに述べたように霊山・信仰対象の山が地域旅行圏の中心となったのである。

このような霊山を核にして地域旅行圏には多くの人々の信仰を集める大小の社寺や四季を愛でる行楽の地や遊所が発達した。

本稿執筆中に次のような短期旅行地の事例を見つけることができた。嘉永6年（1853）3月に奥州南部和賀郡黒沢尻新町（現岩手県北上市）から伊勢参宮に旅立った「道中記」（『北上市史』12 昭61所収）によると、在所を出立した一行は3月晦日北上市の「堂沢ノ下久志」という所で次のように記している。「女衆横山参りニ参り候」横山とは岩手県宮古市の横山八幡宮のようだが、女性だけの旅であったようだ。この八幡宮は北上方面の地域旅行圏を構成する神社のひとつであったのだろう。

## (2) 長期の旅

こうした地域旅行圏の外に出る旅の代表が伊勢参宮である。伊勢参宮は畿内の人々にとっては地域旅行圏内の旅であったが、それについては取りあえず措いておくことにする。

伊勢参宮と言っても、出発する地域によって様々な形態があったと思われるが、ここでは研究の進んでいる東国を中心に述べていくことにしよう。旅は農民の場合農閑期に行われるが、農閑期といえ一般的には冬であり、地域によっては雪道を歩くことになるわけである。

東国の場合在所を出発すると多くは江戸に向かう。その間参拝・見物の対象となるような著名な寺社や景勝の地に立ち寄っている。例えば東北方面からであれば山寺・松島・仙台、それより太平洋岸を辿れば水戸・加波山・筑波山・鹿島神宮・息栖神社・香取神宮・銚子磯巡り・成田山新勝寺そして江戸に入る。一方奥州道中を通れば日光を見物して江戸に入る。

江戸では少なくとも1～2泊して江戸を見物し東海道人に入るが、まず鎌倉・江ノ島を見物。旅人によっては季節にもよるが、相州大山・富士山に登り東海道人に出るという剛の者もいる。掛川宿からは多くの旅人が秋葉神社・鳳来寺を廻り、御油宿で東海道人に合流する。宮宿からは海上七里の渡しで伊勢湾を渡るが、ここでも多くの旅人は伊勢湾を行かずに名古屋に向かう。名古屋城・金の鯨銚を間近に眺めるためである。それより佐屋路を行き津島社を参拝し、木曾川を下り桑名に至る。次宿の四日市を出ると日永の追分まで東海道人と別れ、伊勢への道に入り伊勢神宮参拝を果たすわけである。

伊勢神宮参拝後、直ちに帰途に就く場合もあるが、多くはこれより西国三十三所を廻ったり、奈良・高野山・大阪・京都を廻ったりする。さらに大阪から四国金毘羅等に向かうことも多かった。帰路は中山道を通り洗馬宿から善光寺に向い、在所へと帰って行く。

伊勢参宮後各地を巡ると、場合によっては3か月程を要する旅になるのである。

## (3) 江戸の地域旅行圏

各地にそれぞれの地域旅行圏が形成されたが、最も人口の多かった江戸の地域旅行圏について述べておこう。

筆者はこれまで江戸の地域旅行圏は多くの旅行地を有する最大の地域旅行圏を形成していたと考えていた。思い込んでいたという方が正しいだろう。しかしよくよく考えてみると、御府内を中心とした地域には日帰りの行楽地は多数所在するが、数日の泊り掛けの旅行地は少ない。

浅草寺をはじめとする寺社。川崎大師のように厄払いに収斂したような寺社も人気があった。こうした寺社には特定の檀家・氏子だけではなく不特定多数の人々が参詣に来る。勿論門前町の賑いも大きな楽しみであった。春は梅に桜、夏は螢や花火、秋は月、冬は雪を愛でる所にも多くの人々がやってきた。富士・筑波山・江戸内湾を望む所も魅力的な場所であった。

これに対し数泊の旅行地は西方には金沢八景・鎌倉・江ノ島・大山。あとは成田の新勝寺・香取・鹿島・息栖の三社巡りと銚子の磯巡りや筑波山があるが、成田以遠に足を延ばすことは多くはなかったようだ。現在では高尾山や御岳山は東京近郊の手軽な山として都内と近県の人々が訪れるが、近世では両山を信仰する人は訪れたが、不特定多数の人々が訪れるところではなかったようである。

江戸は幕府開府以前は太田氏の支配する地であり、武蔵の原が広がるだけの未開の地ではなかったであろうが、城下町や商業都市として繁栄したところではなかった。江戸幕府の所在地となって急速に発展したところであった。そのため地域旅行圏の核となる伝統的な信仰の山またはそれに代わるものが存在しなかったのである。

江戸は巨大な城下町である。そこに居住しているのは「武士」は別として、商人、振り売り

などのモノ売り。土木建築をはじめとする職人たちである。彼らは例え金銭的に余裕があったとしても、多くの日時を確保して数日の旅に出ることは困難であったろう。そのため江戸の城下町には日帰り程度の参詣寺社・行楽の地が多数成立したのである。ましてや多くの日数を要する伊勢参宮に多くの人々が行くことなど困難であった。伊勢参宮など長期の旅の主役は農民であった。

江戸以外の城下町の地域旅行圏については大いに関心のあるところであるが、残念ながら調査する余力はない。

## ② 旅日記の成立と旅の実態

### ○なぜ日常の日記を書くようになったのか

日記には日常の出来事を記す日記と、非日常を記す日記がある。非日常の日記を代表するのが旅日記であるが、ここでは最初に人々が日常の日記をなぜ書くようになったのかについてみていくことにしよう。日記を書くようになったことについては、さまざまな要因を挙げることができるだろう。そのひとつとして「日」の確認があったと考えられる。今日は何月何日であるのか、干支は何であるのかさらに今月はどの月か小の月かを確認というか忘れないために日記を書いたということである。

現在であれば今日が何日であるか、何曜日であるかを忘失しても新聞やテレビ・時計・スマホ等々確認する手段は幾らでもある。しかし近世あるいはそれ以前においては簡単に確認することなどできなかったであろう。たとえ手許に伊勢暦などがあっても、今日が何日であるのかを忘失してしまえば役に立たない。暦は今日が何月何日であることを教えてくれない。

今日が何日か、干支は何かということは日々の生活に重要なことである。何日かは言うまでもないが、干支も重要であった。干支はその日の吉凶や農作業を左右するものであった。現在からみれば迷信の一言で片付けられてしまうが、当時は重要なことであった。筆者が盛んに農村部の調査を行っていた時、時折農家の人から例えば「今日は胡麻の種を蒔いてはいけない日だ。小豆を蒔いてはいけない日だ」というようなことを聞かされた。

近世の人々が日や干支を忘れないための手段のひとつは、今日は何日、干支は甲子などと紙に書き記すことであつたらう。名主や村役人層は大袈裟にいうなら「日」を管理する必要があつたのである。あくまでも仮定であるため実証史料を示すことは出来ないが、初めのうちは今日はそして明日は何日であるのかを簡単にメモしていたのかも知れない。

日や干支のメモ書きに必要な事項やその日の出来事などを書き込むようになり日記へと発展したのであろう。

### ○なぜ旅日記を書くようになったのか

非日常の日記の代表が旅日記である。ここでいう旅日記は主に農民など一般庶民の書き残したものである。旅日記というと一般には旅中の楽しかったことや感激したこと、珍しい事象の見聞、美しい風景に感動したことなどが記してあると思いがちである。しかしこのような旅・旅行の記録を記すのが当然のことになるのは近代に入ってからのことである。それは学校教育における作文の授業によるところが大きいだろう。そのため時には旅行の記録は作文授業の結果画一的になってしまう。このように記すと作文が教育に悪影響を与えたように思われてしまうが、文章を書くということに作文が大きく影響・貢献したことは間違いないのである。

近世の旅日記自体は古くから記されているものと思われるが、現存する東国の旅日記を見ると1800年前後から盛んに記されるようになったようである。

旅日記がなぜ記されるようになったのだろうか。ようやく旅に出られたのであるから旅の様子を記すのは当然の行為、あるいは記録を残したいという意識の高まりなど、時代背景や日記の筆者の心情を慮れば様々な理由を挙げることができるが、旅日記の成立の最大の要因は必要に迫られてのことだろう。

近世における社寺参詣等の旅はひとり旅ということは少なく、複数、団体であった。特に伊勢参宮など長期の旅の多くは団体で行われたようである。ひとり旅ともなれば危険が伴うことは当然として、旅の知識・地理認識をはじめとする多様な知識が必要である。ここで伊勢参宮などの同行人数の事例を幾つかみてみよう。

千葉県千葉市幕張の伊勢参宮者の同行人数を白井千万子翻刻・校訂『幕張・子守神社「神主日記」』（崙書房出版 平12）によりみてみよう。本日記は幕張に所在する子守神社の神官が書き残したものである。なお幕張村は馬加村とも記しその一部の区域は現在習志野市に編入されている。

#### 幕張村伊勢参宮一覧

出発年月日	地区・人数	帰村月日
文政2年1月13日	上宿より 19人	2月18日
同 年5月27日	下宿より 28人	7月6日
同 年6月1日	中宿より 9人	7月1日
文政4年1月12日	新田より 10人	2月16日
文政5年6月5日	上宿より 19人	8月1日
文政7年1月10日	上宿より 29人	2月14日
同 年6月11日	中宿より 21人	7月6日
同 年6月12日	下宿より 20人	—
文政8年6月1日	上宿より 18人	7月17日
文政9年1月12日	上宿より 15人	—
同 日	大々神楽 13人	3月22日
文政10年1月14日	— 1人	—
文政11年1月10日	上宿より 12人	—
文政13年1月10日	上宿より 26人	—
同 年6月1日	下宿より 35人	7月27日
同 年6月2日	中宿より 14人	7月11日
天保3年6月13日	中宿・下宿より 18人	—
同 年6月15日	上宿 23人	7月29日
天保7年1月10日	上宿より 24人	2月17日
同 年6月3日	上宿 9人	7月10日
同 年6月3日	下宿より 24人	7月21日
天保10年6月2日	中宿より 20人	7月7日
3日	下宿より 18人	
天保11年1月12日	上宿・新田より 19人	2月23日
同 日	上宿より 24人	2月23日
同 年6月1日	下宿より 28人	
弘化2年1月13日	— 20人	—

幕張村内は上宿・中宿・下宿・新田の地区からなっていたようだが、伊勢参宮は基本的には地区ごとに行っていたようである。

文政9年（1826）1月12日出発は2グループで、1グループは上宿15人だが、もうひとつのグループは「伊勢大々神楽」とあるだけで、どの地区かは不明である。このグループは御師宅で神楽を奉納するわけだが、神楽奉納は費用も掛かるため幾つかの地区の合同かもしれない。なお大々講の一行の帰村日については、日記に「（3月）廿二日晴天 正月十二日伊勢大々講拾三人出立内拾壱人帰村、注連納として神酒奉る、各々参詣絵馬額一面奉る」とある。

文政10年1月14日は1人であるが、これは馬加（幕張）の者が1人実叡村の講中に参加したためである。

ここでは幕張村の伊勢参宮に関する詳細な検討は行わないが、参宮の日数から見ると参宮後直ちに帰村する場合と、参宮後畿内を廻った二つの形態があったようである。

次に幕張と隣接する鷺沼村（現千葉県習志野市鷺沼）の伊勢参宮者を『渡辺東淵雑録』（根崎光男校訂 習志野市教育委員会編集発行 昭56）によってみてみよう。なお渡辺東淵は鷺沼村の医師である。

#### 鷺沼村伊勢参宮一覧

出発年月日	人数	帰村月日
文政10年1月16日	15人	
文政11年1月12日	36人	
天保2年1月10日	28人	
天保11年1月10日	60人	
弘化4年1月10日	64人	
嘉永3年1月10日	13人	2月10日
同 年1月21日	23人	2～4月
嘉永6年1月10日	16人	2月9日
安政5年1月10日	15人	2月11日

幕張村においては一定の周期とまでは言えないものの、あまり空白期間を置くことなく伊勢参宮に出ているが、鷺沼村の場合天保2年（1831）以降9年ほどの空白がある。その原因は分からないが、長い空白があったためか天保11年の伊勢参宮は60人もの団体になってしまっている。

現在では旅行者の人数が60人では団体といっても小規模なものだろう。しかし当時は歩いての旅である。しかも現在と異なり整列して歩くなどの経験もなければ訓練もしていない。一体どのような旅であったのか想像もつかない。先達あるいは責任者のような立場の者もいたであろうが、先頭と最後はどうなっていたものか。宿泊なども想像ができない。

あまりにも多くの人数である。当然のことながら事件も起きている。『渡辺東淵雑録』には事件の詳細は記してはいないが、断片的に各所に記された記事を見ると、参宮者一行の□蔵（名前は分かっているようだが、支障があり□としたようだ）は東海道の天竜川の渡船時に問題になるようなことを仕出かしたようである。往路か帰路かは記していないが帰路と推定できる。

一行の帰村については「二月十四日四人帰り、十五日五十五人帰り」とあり、問題を起こした□八と□蔵については「天竜川渡シ一件有り 二月廿七日□八ノ□蔵帰ル」とある。この内「□八」とは□蔵の親または雇主であったとみられる。つまり□八のところの□蔵である。

事件はその場の話合いで解決できるようなものではなかったようで、裁判に発展している。

全てが解決したのは2年後の天保13年に至ってのことで、『渡辺東淵雜録』には

天竜川一件相済  
□蔵手鎖、外々ノ者ハ過料拾三貫文也、  
五月四日帰村  
□蔵手鎖三十日

いずれにせよ散々な伊勢参宮であった。

このような事件を起こしてしまったためか、次の伊勢参宮は7年後の弘化4年(1847)になっている。出立は1月10日で同行人数は64人と天保11年の60人を上回るものであったが、この日は近隣の村々からも伊勢参宮に旅立っている。

弘化四年丁未	谷津村同日立
正月十日立 子ノ年ヨリ八年め也	三十人ト云リ
伊勢参宮立 六拾四人	馬加上下共七
村内別れの躰五拾文ツ、	十人ト云リ
山ツキノ祝、ヨコハノ重箱相止ナリ	同十日立ナリ
山ツキノ祝、内祝ト云リ	下宿五十壺人
山ツキノ祝、廿二日也	上宿十九人
安五良代参	奉納金壺分
	道中遣ひ分
二月十一日江戸着ト云	

一行64人に対し一人に付50文の躰(はなむけ)が渡されている。村入用からの支出であろうか。「山ツキノ祝」とあるが、これは参宮者一行が伊勢に到着したと思われる頃、村内の神社などでそれを祝う行事である。下宿・上宿など一見人数が合わないところもあるがそれは措いておこう。

1月10日に伊勢参宮に出立したのは鷺沼村だけではなく、谷津村からは30人、幕張(馬加)村からは70人が同じく伊勢参宮に出立している。この外「安五良代参」とあるが詳細は不明である。

30人でも多いのに、64人・70人の団体の旅は想像もつかない。鷺沼村の一行は再びトラブルを起こしている。

伊勢下向	。十六日船橋海老やニテ和談
妙典ノ下町ノ者ト口論	十四日夜四ッ過帰り
吉平ノ勘蔵	打身斗り
手□(負) 式人	
与右衛門ノ長松	疵二寸余

妙典は千葉県市川市で帰路の道筋であり鷺沼村には程近い。村までもう少しというところで事件を起こしてしまったわけである。

嘉永3年(1850)1月には10日に13人が、21日に23人が伊勢参宮に旅立っている。なお21日

出発の中には実籾村（現習志野市）の多郎左衛門の弟が加わっている。10日出発の13人は2月10日に帰村している。日程から見て伊勢神宮参拝後直ちに帰村したものであろう。それにしても強行軍である。

21日に出発した一行の帰村日はまちまちで2月28日に3人、29日に8人、3月14日3人、4月4日に2人、6日5人、10日2人が帰村している。これは参宮後直ちに帰村したグループと畿内を廻ったグループに分かれたためであらう。

安政5年（1858）には下宿の者15人が伊勢に出立し、2月11日帰村しているが、同行の一人が旅の途次で死亡している。

江川多（太）郎左衛門御代官所駿河国駿東郡今沢村清左衛門殿御セハニナリ、二月五日夜九ッ時病死ス、弥右衛門二男弥惣吉、同所禅宗祥雲寺ニホウムル、沼津ト原ノ間ノ村ト云々

この年には幕張の名主も伊勢参宮の途次大阪で死亡している。

二月中 三月廿四日トムライス  
伊勢大々講中 馬加村名主吉右衛門主人大坂ニテ病死ス  
ト云々

喧嘩沙汰がないかと思えば行旅病死者である。近世に限ったことではなく現代でも行旅病者や死者はあるが、その処理は大変である。

『渡辺東淵雑録』は安政6年で終わっているが、これ以降の伊勢参宮においても事件を起こした可能性は極めて高い。

なお、両書共に伊勢参宮だけではなく成田参詣や出羽三山登山についても記されていることを断っておく。

団体旅行—これについての定義が必要かもしれないが、何人以上が団体などという定義など作れないだろうし、作ったところであまり意味はないだろう。ここでは取りあえず数人以上の旅とでもしておこう。

団体の旅において旅籠屋の料金、昼食代、渡船賃等々を各人が支払っていたのでは面倒であるし、時間の無駄でもあったろう。そこで会計担当が登場したと考えられる。旅行前に会計担当が決められ、旅立つ前に一定の金額を会計担当に渡したようである。旅中の支出については国に戻った時何らかの方法で会計報告をしなければならなかったろう。そのため旅中の支出をメモしておかなければならなかった。村方調査などで時折目にする旅中の金銭出納を記した帳簿はまさにこうした目的から作成されたものとみることができる。

出典を忘失したが、伊勢参宮の一行が参宮を果たすと、会計担当が宿泊所である御師宅で出費を計算し余った分を一行に返却している。それは一行の伊勢からの行き先が分かれるためであった。伊勢からそのまま帰るもの、西国三十三所を廻るもの、奈良方面に向かうものなどがいたためである。

会計担当者は当然文字が書けなければ勤まらない。会計帳簿には次第に金銭以外のことも記録するようになり、旅日記が作成されるようになったのだろう。この様にして成立した旅日記とは別に「紀行文」が多く記されている。「旅日記」と「紀行文」についてここでは規定できないが、漠然とはあるが明らかに「旅日記」と断定できるものもあれば「旅日記」か「紀行文」か判別しがたいものもある。判別する必要などないのかもしれないが。

### 3 旅と風景

旅に出る。旅行に行くとなれば楽しみのひとつは日常とは異なる自然の風景或いは自分達の暮す地域とは異なる家並みや生活風習を見聞することである。しかし旅日記の多くには自然の風景についての記述が少ない。そのためそれぞれの時代の人々が風景をどうみていたかについては、和歌との関連で語られることが多い。和歌における名所である。一般的にいう観光名所と区別するためここでは和歌の世界における名所を「和歌名所」と呼ぶことにする。

近世前についての和歌については多くを知るところではないが、和歌とそれを取巻く環境は日常生活の中にも入り込んでいた。中でも「和歌名所」の影響は大きく、風景を見る目が「和歌名所」により規制されていた、制約されていたと言われている。

著名な和歌名所のひとつとして知られるのが三河の八橋である。『伊勢物語』に取り上げられて以降和歌名所となったが、それは著者ということになっている在原業平がここで「唐衣きつつなれにし……」の歌を読んだことによる。『伊勢物語』の作者等については諸説あり、古くから業平の作ではないと言われてきたが、業平の『伊勢物語』として定着してしまった。さらに現実に東国への旅はしていないであろうから、作者は現実の八橋を見ていないのである。しかし歌を読むべき和歌名所として定着した地では歌を詠んだのである。

阿仏尼の紀行文（『中世日記紀行集』新日本古典文学大系51 岩波書店 平2）により八橋をみてみよう。彼女が若い頃に記した『うたたね』には八橋について次のように書いている。

三河国八橋といふ所を見れば、これも昔にはあらずなりぬるにや、橋もたゞ一つぞ見ゆる。  
かきつばた多かる所と聞きしかども、あたりの草も皆枯れたる頃なればにや、それかと思  
ゆる草木もなし。

歌を詠むような眺めではなかったようである。もちろん歌は詠んでいない。  
これに対し『十六夜日記』をみてみよう。

八橋にとゞまらんといふ。暗きに、橋も見えずなりぬ。  
さゝがにの蜘蛛手危うき八橋を夕暮かけて渡りぬる哉

薄暗く景色も見えないが歌は詠んでいる。当時阿仏尼は歌人として知られるようになっていたため、歌人の作法としてここで歌を詠んだのである。この日は八橋に宿泊し、翌日は「いとよく晴れたり」ということであったが、八橋の眺めについては何も記していない。

こうした和歌名所に疑問を呈した、あるいは間違いを正したとして取り上げられるのが、和歌名所として有名な和歌の浦の片男波に対する貝原益軒の指摘である。益軒は『諸州めぐり南遊紀行』（帝国文庫22 博文館 昭5）の中で次のように書いている。

○和歌浦に和歌山より—中略—和歌の浦の海べたに出づ、おきに地の嶋おきの嶋みゆ、和歌の浦は、南をうけて入海なり、俗説に、此浦におなみ有てめなみなし、故に片男波と云、此説非也、男波とは大なみなり、女波とは小波也、われもとより其説を信ぜず、あめつちの内、などてかかるつねの理にたがひぬる事やあるべきとおもひしかば、かへりて後人にもかたり、其迷をさとさんためわざと此浜辺にやすらひて、心をとめて久しく見侍りしに、いさゝか俗説のごとくにはなし、只よのつねの所のごとく、おなみめなみともにくたび



もたち来れり、

と記し「和歌の浦にしほみちくればかたをなみ」と古歌（山辺赤人）に詠まれている「かたをなみ」とは潮が満ちてくると「潟」がなくなるという意味だと述べている。

要するに観察の結果、片男波＝大波はあるが、女波＝小波はないということは無く、大波も小波もあったということである。貝原益軒の観察に対し井上忠氏はその著『貝原益軒』（人物叢書 吉川弘文館 昭38）において、「なお紀行記においても科学的な眼光が随所に及び、各地に伝わる古歌伝説に対しても非合理的なものには実証により飽くまでその嘘りをあばくに容赦がない」と評価している。後に述べることに重複するかも知れないが、非合理的・俗説そして科学的な眼光とくると、非合理・俗説は人間を惑わすものであり、すべて正さなければならないということになってしまうが。

例えばよく指摘されることだが同じく山辺赤人の詠んだ「田子の浦ゆ うち出でてみれば真白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける」では雪で富士山が見えないことになるが、今は雪が降り積もって山頂が白いと解されているようである。合理的・科学的に解釈されたということであろうか。和歌名所の矛盾は探し出せばきりが無いだろう。

さて益軒の片男波の指摘は研究者が評価するところとなったが、ここでは西田正憲氏の『瀬戸内海の発見』（中公新書 平11）により、和歌名所及び益軒などについてみてみよう。西田氏は近世以前の風景観について次のように述べている。

わが国においては、近世以前の人々は伝統的風景観の枠組みに支配されていた。伝統的風景とは、歌枕（歌名所）や名所旧跡に代表される定型的、類型的な風景であり、古代から近世にかけて規範化された風景、あるいはコード化された風景といえる。歌枕は万葉集のころに生まれ、歌に詠まれた地名つまり名どころとして定着しいき、名所旧跡は主として旅が盛んとなる江戸時代の社寺、日本三景、本朝十二景、八景、耶馬溪式溪谷、旧跡（神話、伝説、故事、文学の地）などとして普及した。

日本人の風景観は和歌名所等々の規範により規制されていたと述べている。述べていると断定したが、筆者の解釈に間違いがあるかもしれないことを断っておく。

さらに西田氏は「現代の人々には縁遠くなったが、近世前の人々はいかに、万葉の地、神話の地、伝説の地、文学の地などにとらわれていたことか」と述べている。

このように規範化された風景に対する批判的な目が近世後期にあらわれてきたという。例えば古川古松軒は巖島を日本三景というのはおかしい。たいした島でもないのに、平清盛の築造ということで騙されている、全国には巖島よりすぐれた景勝の地が数多くあると述べているという。この外にも多くの紀行文などを提示し「従来見立てとは異なる自由な見方が普及してきたのである」としている。

自由な見方と言えばそうだろうが、古川古松軒は一体何が言いたいのだろうか。人工物の一切ない自然の風景ということであろうか。箱庭的風景の展開する日本の風景は人工物と一体になっているのである。巖島＝巖島神社は「ずるい」とでも言いたいのだろうか。

これが日本の風景である。日本にはグランドキャニオンはないのである。こういうことを言う私が既成の風景観から解放されていないのかもしれないが。

勿論人工物など必要のない自然の風景も日本にはあるが、人工物・伝承などを日本の風景から取り去ってしまったら、何処も彼処も同じ風景になってしまう。西洋人とて欧州の風景の多

くをギリシャ神話・キリスト教及びローマ帝国の関連からみているのではないか。彼らこそ日本にきて既成の風景観から解放されたのだらう。

新しい風景観を得たことに対して基本的には異論はないが、風景観に限らずこうした研究成果に対し常にある種の疑問が付きまとうのである。すなわち大衆への還元であり、大衆がこれを如何にして受容したのか、或いは拒否したのかである。

貝原益軒が片男波は無いことを確認したというが、彼の主張が当時どの程度人々に影響を与えたであろうか。片男波のことは出版物に掲載されているのであるから、かなりの人がこれを目にしているわけであるが、これに対する当時の教養人の反応はどうであったのだろうか。このことについて記したものは無いようである。

片男波や和歌名所の矛盾については既に知られていたことであり、歌人達も「歌の世界」のことに承知していたようにも思うのだが。

こうした研究成果による風景論と一般大衆の旅における風景をみる目である。団体旅行の旅人も旅中において様々なものを目にする。自然景観・村や町の景観・風俗・食物等々日頃自分達の村や町で目にするものとは異なるもの、日常とは異なる発見があったはず、否必ず発見があった。しかし美しい風景や日常とは異なる発見は旅日記に記されることは少ない。

その理由の一つとして考えられるのが、風景や日常と異なる発見の書き方、表現方法を知らなかったことが挙げられる。さらに旅日記は知人や後世の人が旅をする時の参考に書かれたようなものが多い。

的確な表現ができないので研究成果による風景論などと書いたが、筆者自身これに異を唱えるものではないし、どちらかと言えば賛同する立場である。しかしこうした風景論というか風景観は近世の知識人が抱いていたもので、6～70人もの団体旅行者が抱いていたわけではないということである。研究者は承知していることだが、芭蕉の『奥の細道』は文学作品である。しかし旅に関する講演を行うと、必ずといってよいほど芭蕉の旅を下敷にした質問がある。この点を何らかの方法で示しておかないと、一般読者は多くの近世の旅人がこのような風景観を抱いていたのかと錯覚してしまうからである。

庶民の風景観という大袈裟だが、それを示すような例を掲げておこう。それは橋南谿が奥州南部を旅した時のことである（『東遊記』改造文庫 昭14）。

奥州南部の地は、日本東北の極ゆゑ、殊に野鄙なり、然れども其人甚質朴にして、又甚神仏を信ず、就中伊勢太神宮を深く信じ、いかなる貧しきものも、男女とも参宮せざる者なし、余盛岡近所にて馬に乗りしに、其馬かたの物語に、我祖父代々駿河と名附といふ、余も驚きて、馬かた杯をする身の父の、いかなればかゝる国名を名乗る事ぞ、御身の父祖はいかなる家筋の人にやと問ひしに、馬かた答へて、此名には深き由来こそ侍れ、某が父祖参宮せしとき、道すがら諸国の景色風土を見及びけるに、其中に駿河国程よきはなしと思ひけるが、帰りての後も猶彼の国ゆかしく覚えけるまゝ、みづからの名を駿河と附て、一生を終ぬ、我父も亦、其父の名なれば、同じく駿河と名乗りぬ、某も又、駿河と名乗るべきを、在所の庄屋あまり大なる名なりとて、いなみけるまゝ、某ばかり又助と申なりといへり、余も覚えぬ馬に笑を催せり、誠に是等の事にも、彼地の質朴なること思ひやりぬべし、

駿河と改名した祖父が文字を書けたのかは勿論不明だが、彼は感動した風景をこのような方法で表現したわけである。文字を書けたとしても前述の日記のところでも述べたが、多くの大

衆は風景の描写方法を学んでいなかったのである。多くの旅日記には感動した風景を「筆紙に尽くし難し」と記している。

かなりの飛躍であるが、これまで述べてきたことを幕府の政策と大衆という観点からみてみよう。

近年近世史の学会では通説となりつつある鎖国の否定に関連してのことである。近世史においてはこれまで近世は鎖国の時代とされてきた。これに対し対馬藩は朝鮮と長崎は西洋と薩摩藩は琉球と、そして松前藩はアイヌとの交流があった。こうしたことから近世は鎖国ではなく世界との繋がりがあったというものである。

私自身は全面的に納得できるものではなかったが、風景観について書いているうちに、支配する側と、される側。幕府エリート及び交易に従事するものと、その埒外にあるものという観点から見るべきではないかということである。

交流があったといっても、その交流を肌で感じることは極めて少なかったであろうが、幕府上層部や関係者は、開国ということになる。交流の埒外にあった人々、その多くは農工商の身分であるが、彼らにとって日本は鎖国であったということであり、近世日本には海外に通じている階層と鎖国の階層があったということになる。海外との交流の状況は埒外のものに還元されることはなかったである。江戸に参府する外国人を庶民は街道筋で目にするにはあったであろうが、それは珍しい見物の対象でしかなかった。

以上のことから、風景観に限らず研究者・知識人の主張や著作を共有できる階層とその埒外にあるものがあるということである。こうした主張や著作がどのように埒外の人々に還元されるか、受容されるかが大きな問題である。研究者や知識人は時に高みに立ち埒外のものを無視するように見えることもある。

しかし埒外の間人が世の中では大勢を占めるのである。如何に格調が高い主張・論調であっても、埒外の人々に還元できなければ何の変化も変革も起きないということである。1960~70年代の安保闘争・学生運動の主張は「埒外」の階層には還元・受容されずに終わったのである。

## おわりに

近世旅行史に関することを脈絡なく記した。しかもかなり飛躍したことまで記してしまった。それは近世交通史、旅行史が現在ひとつの頂点に達しており、次の段階に進む時期に来ているのではないかと思うからである。この雑文が次に進むための素材になれば幸いである。

(やまもと みつまさ 交通史学会会長)